

忌を記念する此上なき勞作云はねばならない。(菊判一
二三七頁、東福寺發行、非賣品)〔藤〕

● 榊尾山
高山寺明惠上人

村上素道編著

鎌倉時代、法然、親鸞、榮西等の諸高僧が出現した際に、教界の明星として一方に光輝を放つてゐたものは明惠上人であつた。本書は上人が流離困厄の中に在り乍ら毅然として聖道の復興の爲めに起ち、如來の正法を末世に實行せんむ努力した生涯の行蹟を詳叙したもので、著者が禪僧であり乍ら上人を景慕する餘り、各種の史料を討ねて之を著はされたのである。その内容は、初めに行實年譜を記し、次に逸事、法語、交遊、餘譚を述べ、附録として系譜、上人著作目録、日用清規、高山寺置文等を載せてあつて、上人の全象を明にせんむ努めてある。明年は上人の七百回遠忌に相當るが、此の際に本書が出て、此の高僧の清高なる人格を世に傳へるのは誠に悦ばしい事で教界に感動を興へることが鮮少でなからう。

(菊判三四〇頁、榊尾高山寺發行、價參圓)〔松野〕

● 修訂 建武年中行事註解 和田 英松著

建武年中行事は後醍醐天皇の御撰、順徳院の禁祕御抄と共に有職故實の研究に最も重要な典籍をなすものなることは後水尾天皇が兩者をならべあけて寔に末の世の龜鑑なりとたゞへ給うた御言葉によつても知ることが出来る。然るに禁祕御抄には古來數多の註釋書があるに反し、建武年中行事は窺ひ見るべきもの少く僅に谷村光儀の略解があるのみ、それも文字通りの略解であり、且つ本文にも亦誤脱が尠くない。本書はかくの如き缺を補はんが爲に著書が嘗て群書類説本を原し諸本を以て對校すると共に、その全文に就いて詳細な註解を加へて公刊されたもの、増訂再刊である。別に附録として同じく後醍醐帝の御撰たる日中行事に就いて大石千引の略解を校定し附載してゐる。著者はかくの如き仕事に最適の人現實の種々なる事情に餘儀なくされて古典の教養に貧しからざるを得ない現下の學徒に裨益する所が少くない。殊にその卷末に附せられたる詳細なる索引は、本文中に